随筆

チーボーと私

飯　田　良　樹（久居一志地区）

昨年は、この『三重医報』にテレビ番組の話を２編投稿しましたが、今回は少し視点をかえて、私に「うちのこと、チーボーと呼んでや」と言った女性について書いてみたいと思います。

奈良医大を卒業後第２外科に入局。松原市民病院外科勤務の後、大阪府立病院の脳神経外科に勤務しました。当時、服部 裕部長の下で脳神経外科を支えておられた鬼軍曹的な鎌田喜太郎先生に大変しごかれました。１年後に大阪大学が大阪府立病院に特殊救急を作ることになり、増設された特殊救急部に脳神経外科からも２名出せとの事で、私がその内の一人に任命されました。

脳神経外科もそうでありましたが、特殊救急部でも早朝から私の苦手な英文論文の読み合わせがありました。また、経験したこともない救急症例（たとえば、ヤクザ抗争で至近距離から散弾銃で腹部に撃ち込まれ救急搬送されてきた男を開腹して、散弾を取り出しても取り出しても散弾が残ってしまいましたが、鉛中毒にもならず退院した症例など挙げればきりがありません）、最新鋭の機械の取り扱いや、今では当たり前の高カロリー輸液の鎖骨下静脈確保など、私の様な勉強嫌いには大変ためになりましたが、精神をすり減らしました。そこで息抜きが必要となり、学生時代より嗜んでいたジャズにのめり込みました。

その頃、北はロイヤルホテル（現在のリーガロイヤルホテル）の地下でジャズピアニストの世良譲がセラバーを開き、曽根崎にはロイヤルホースが、南では日航ホテルのスカイラウンジ、道頓堀のアーゴなどで、毎夜いろいろなジャズメンが演奏をしていました。

同僚の飯田紀之先生の知り合いがセラバーに顔が利くとのことで、なかなか使わせてもらえないボトルキープボックスを使用して良くセラバーへ聴きに行きましたが、それよりもっと通い詰めたのがロイヤルホース。

有名な外人ジャズプレイヤーや国内有望若手などが日替わりで演奏していて、なかでも私のお気に入りは若い女性歌手でした。

その頃の日本女性歌手はスラリとした体形に甘い声でジャズ愛好家を魅了していましたが、その子はチンチクリンでお世辞にも美貌や色気があるとは言えませんでした。でも歌はパンチがあり、歌と歌との合間のしゃべくりが大阪弁の一人漫才を聞いているみたいで、日々の疲れが、その子に癒されました。

頭を丸めた男性が、歌の途中で帰ろうとすると「坊さん、もう帰るんかいな」と唄いながら声をかけたり、何故かスカートではなく何時もズボン姿でありましたが、前のチャックを閉め忘れていた時にでも「しもた！開いとったんかいな。前のお客はん、もうけたな」とあっけらかんとして唄いだします。

お得意は、最後の歌も終わり皆が帰りだすと「暇な人、聴いてってんか」とピアノに向かい「テネシーワルツ」を弾き語る事でした。また、のりのりの時は「Ａ列車で行こう」。

一度、ピアノの弾き語りが終わった後に、食事に誘った事がありました。その時は、若い外人女性が付いてきました。「飯田はん、うち、来年アメリカへいくねん。そんで、この子に英会話なろとんねん」

彼女は、本当にその後アメリカに行ってしまい音沙汰がなくなりました。

次に彼女に出会ったのは10年ぐらい後。ジャズ雑誌スウングジャーナルの通信欄に掲載されているロイヤルホースの出演者に彼女の名前を見かけたので会いに行きました。事情を聞くと「あれからアメリカへ行って、教会のゴスペルコーラス隊で歌ってて ん。そこの黒人牧師と結婚しイサが生まれたんやけど、別れてしもて、帰国して神戸のおかんと暮らしながら、掃除のおばはんと歌手と

で生計を立ててんのやわ。」

またしばらくして、彼女を見たのは、テレビで歌っている姿でありました。びっくりしてスウングジャーナル誌を見ると、名古屋のラブリーで歌っているところを、ドクタージャズこと岡崎の外科医　内田 修先生（トランペッドの日野皓正、ピアノの秋吉敏子などを世に出し、昨年他界）に見染められて、メジャー入りをしたとの事でありました。もう一つびっくりしたのは、彼女の生年月日が1957年だった事。私が大阪府立病院に勤務していたのが1973年～1975年であったので、彼女はまだ高校生であった事であります。

ここまで書くと、彼女が誰だかわかりましたか？

今や介護用品のコマーシャルで有名な綾戸智絵（現在は智恵）ですね。

三重に公演に来ると聴きに行きますが、会うと「いや～頭の先生や～、まだ生きとったんかいな！」と何時もの調子で言ってくれます（私が直腸癌と知っているので）。

知り合った頃の写真

帰国時のイサ君とチーボー
（文藝別冊『綾戸智絵』より）